

正式にレガリア王室に嫁ぐためには、まずは閨の作法を憶えなくてはならない。

それが夫であるアルベルト陛下からわたしに告げられたのは、結婚の儀も済み、初夜の寝室に案内されてからのことだった。

「どういうことでしょうか」

不安で声が震えてしまう。

レガリア王国の公爵令嬢であるわたしは、幼いころから王妃となるべく教育を施されてきた。

もちろんその中には、閨教育も含まれている。

貴族令嬢である以上、男性を相手に実践したことはなかったが、いつか王に嫁ぐ日のためにと毎日きちんと自慰をするようにと言いつけられていた。

それもあった、今日はいよいよ実践だと股間を熱く濡らしていたというのに……。

「そう不安がらずとも良い。これは子作りに支障がないように、初夜の期間を長めにとることになっているだけだ」

「初夜の期間を、長めに……？」

「そうだ、だからそう緊張せずともよい。ほら」

アルベルト殿下にうながされるまま、わたしはベッドに腰かけた。やわらかで、すべすべとした肌触りで、いかにもこれから長い夜を過ごすのにふさわしそうなベッドだった。

身体が深く沈み込むのすら、なんだかいやらしい気持ちになってくる。

「そなたはこれから、王妃となる。子ができるまでは繰り返し夜の務めを果たす必要があることはわかるな？」

「はい、心得ております、殿下」

「では、その際に何が必要かは知っているか？」

「……子種、でございますか？」

持っている知識をふりしぼって答えた。

セックスについて、もちろんどのようなことをするのかは教えられている。子をなすのには、中に男性の子種をいただく必要があるのだと……、だからこそ、繰り返し抱いてもらえるように自慰を覚えておくようにと言われていた。

処女だからといって、クリトリスでの感じ方さえ知らないようでは夫を満足させることはできない。そう教えられ繰り返し自分の指で触れたわたしのクリトリスは、何も知らなかった頃よりも大きく育ち、今も下着の中でいやらしくひくひくと触れられることを求めている。

「もちろん、子種は必要だ。だがそれ以上に、そなたが膣なかで感じる必要がある」

そういうと、アルベルト陛下はわたしの足に手を置いた。

すり♡すり♡とさすられて、つい足が開く。

そうすると、私の熱いおまんこに、下着越しに指が触れた。

「ああっ……♡」

初めて太く硬い指に触れられて、わたしはそれだけで身体をひくひくさせてしまう。

こんな指に膣なかをかき混ぜられたら、わたし、おかしくなっちゃう……♡

「この分なら、初夜は早く終わりそうだ」

こす♡こす♡とアルベルト陛下の指先が、わたしの下着の上をいったりきたりする。

布がこすれる感覚で頭がふわふわしてきてしまう。ぎゅっと足を閉じたくなるのをこらえて、わたしはアルベルト陛下が触りやすいように足を開いた。

「自分からおまんこを開いて見せるとは、そなたは淑女にあるまじき淫乱のようだな」

「それが殿方の理想だと教わりました。昼は淑女、夜は娼婦であれと……」

腰を浮かせて、アルベルト陛下の指に手を絡める。そうして一緒になつておまんこをこす♡こす♡と刺激する。

そうするとじゅわあ♡とおまんこからあふれる液体が下着に染みて、えっちな匂いがむわ♡むわ♡と漂い始める。

「ほう？」

アルベルト殿下は目を細めると、わたしのおまんこに指をうずめるように動かし始めた。

「あ♡ あっ♡ ああっ♡」

下着ごとぐいぐいとおまんこを刺激されて、わたしは腰をくねらせた。普段から自慰のときには自分からおまんこを触っている。

ぬるぬるになったクリトリスをたっぷりいじって、えっちなお汁でどろどろになったおまんこを指でぐり♡ぐり♡しながらおっぱいをいじる。

絶頂はまだ知らなかった。ある、というのは知識では知っているのに、どうしてもそこにたどりつかない。